

観 音 土 日

昭和63年1月
第8号
年2回発行
編集発行
小出真行



心のきよらかな時は極楽
心のよごれた時は地獄

(宗秘論)



としとれば①



シワがよる
ホクロができる
腰まがる
頭ははげる
ヒゲ白くなる

仙 六歌仙

これは、仙崖和尚の六歌仙の中の一節で、人間というものは年とともに、生理的にシワだらけになり、ホクロだらけになり、腰は曲がり、頭ははげるか白髪になります。でも、気をつけて食をとり、血を若々しくしていき、すとせて色つやだけでも美しくなりますが、それも次第に…。

やはり一番かんじんなのは、内面で心の持ちようだと云うことでしょうね。



三世諸仏 依般若波羅密多故
得阿耨多羅三藐三菩提

(三世諸仏も 般若波羅密多に
依るが故に阿 多羅三藐三菩提
を得たまえり)

「三世諸仏」の「三世」とは、過去、現在、
未來の永遠なる時の流れで、同時に「十方」
を指しています。十方とは東西南北の四方に
東南、東北、西南、西北の四維と上・下の二
方をあわせたものでつまり果てしない空間で
すので、「三世諸仏」とは永遠なる時間と無
限の空間に現れる仏です。ではこの三世十方
にあるもろもろの仏とは具体的にどの仏とい
うことではなく、究意涅槃に至り(最上のさ
とり)、無所得に目ざめた人(この世に存在
するものは全て誰の所有物でもなく、自分の
ものは何ひとつないのに気付いた人)つまり、
特定のエリート族でもなければ、スーパーマ
ンでもありません。お互いのこの私達のこと

なのです。

「阿耨多羅三藐三菩提」とは、梵語の「ア
ヌッタラー・サムヤクサンボーディ」の音訳
で「無上正等正覚」と訳されます。これはこ
の上もない完全なさとりを指してしまして、
(限りなくすぐれ正しく、普遍である。)

この般若の智慧によって、このさとりは万
人の心に宿っているということなのです。

「梁塵秘抄」に

「観音、勢至の遣り水(庭園や境内などに
水を引き入れ流れるようにしたもの)は あ
のこたら(阿耨多羅)とぞながれいづる…。」
と水音に見たててうたっていますし、

また、最澄が比叡山の中堂建立のときに

「あのくたら三みやく三ぼだいのほとけた
ち、わがたつそまに冥加あらせたまえ」
の一首はかなりの人に知られています。

要約しますと、過去、現在、未來の三世に
いるところの目ざめた人々は、全て智慧の完
成目指し、この上ない正しい目ざめをさとり
得られたのです。これは時間と空間をこえて、
全ての人々が正しいさとりを得られることの
確約なのです。



ご祈祷と薬とは

共に必要



「謹んで神水一瓶を加持して、且弟子の沙
弥真朗を勸して奉進せしむ 願わくは薬石を
添え不祥を除却したまえ」

「性霊集より」

これは「弘仁天皇御厄を祈誓せし表」とい
うお手紙の一節でお大師さまが、四三歳の時
嵯峨天皇のご病氣平癒を祈って、お加持水一
瓶を弟子の真朗沙弥(やがて比丘となる入門
修行の僧)を使者として奉進せられた時のも
のです。その内容は

「天皇のご不快の由をうけたまわり吃驚の
あまり茫然自失のありさまでございます。そ
こで弟子の僧らと密教の修法によって、高雄
山寺で一週間の期間を限って、真言を念誦し
護摩の秘法の火を昼夜に梵き続けて仏天の冥
護をひたすらに仰ぎ、ご病氣平癒をご祈祷致
しました。

その効験のほどはよく分かりませんが、一
生懸命にお祈りしました私の微衷をご推察下
さい。謹んでお加持水一瓶を使者に托して捧
げ奉ります。どうかこのお水を添えてお召し

上がり下さい。またいしばりのお手当でもなさってご病気を一日も早く取り除いて下さいますように」

という大意です。

嵯峨天皇とお大師さまとは、非常に親密な信頼関係に結ばれたご交際の間柄でありましたが、そのうえに高野山下賜の勅許をいただいた後であるだけに、お大師さまも精魂を傾けてご祈禱されたことでしょう。

そのお加持した浄水を奉進されるにあたって「このお水にお薬を添えて召し上がって下さい」
とありますが

私達は生身の肉体をもっている以上、身体が不調の時には薬とか、針とか、お灸とか、休養とかの手当てがいります。さらにそのうえに心の持ちようを正し、霊的問題の善処を凶るといのが宗教（信仰）の受け持っている分野でしょう。従ってお大師さまの教えは医学と相対立したり衝突したりするものではないのです。もちろん度が過ぎて薬害になったり、「医は仁術である」が専ら算術となつての薬漬けでは困ります。でも本当はお互いに足りないところを補いあう関係にあるのです。

私達は肉体だけでもなく、心だけでもないのです。また食べてさえおればいいというものでもないし、信仰さえしておれば医者も薬も食料もいらぬというものでもありません。肉体にも心にも、共に栄養を与えて健やかになるように、物と心のどちらにもかたよることのない配慮が必要なのではないでしょうか。

お不動さま



「お不動さま」は、私達人間の色々な幸福を妨げる悪魔を降伏し寂靜不動の心境に住していますので「不動明王」と言われます。又仏様の中心である大日如来の使者として私達を直接救って下さる仏さまですので「大日大聖不動明王」とも申します。

お姿は、右手に剣を持ち左手に四絹索（繩）を持っておられますが、この剣は「智恵の剣」

といまして、自分と他人の貧（自分の思うようにしたい）、瞋（思うようにならないと怒って腹をたてる）、痴（そこで大声を張り上げたり、心のなかでぶつぶついう）の三毒の愚かな迷いの心を智恵の剣によって断ち切り、怠け者や暴れ者や強情者の想いを縄でしばりあげて悪事をしないように、善心を起すまで離さないようにして下さる温かい心の表れでもあるのです。背中に火焰を負うていられるのは、私達の一切の迷いや災難や障りを焼きつくし清めてあげようという心境で、精神的にも肉体的にも大安楽にしてゆるぎない大盤石の上にドッカと座っておいでになりますのは、私達に働きかけてくる霊的な重い障りを大きな石で動けないように清めて下さる心境なのです。

この「お不動さま」は大日如来の教訓命令を否応なしに果たさんがための強い意志の力を青黒い身体の色と、恐しい顔のかたちに表わしておられますが、その本心は大変慈悲深く永遠に私達人間に奉仕を誓つての僕の姿を示すために髪の毛を七つに結んで左の方へ垂れておいでになります。それから下の牙を上に向けておられるのは真理を追求する向上の

意欲のしきであり、上の牙も下に向けておられるのは、悩めるものや苦しんでいるものの為に限りない慈愛を注がれていることを示すのです。

この様に上に向って菩薩を求め、下に向って救済の志ざしを立てておられますので、発心の立場として十三仏の一番最初に配置されているのです。

それから他の如来や菩薩はみな蓮華の上に立ったり座ったりしておられますが、この「お不動さま」に限って頭の上に蓮華をのせておられるのは苦しい状態にある者を頭の上に乗せて楽しい境地へ運んであげようとする御誓願なのです。

ご真言は

ナウマク・サンマング・バザラダン・

センダマカロシヤダ・ソハタヤ・

ウンタラタ・カン・マン・

(三世十方に遍満する金剛部諸尊に礼したてまつる。暴悪なる大忿怒尊よ。(お不動さまの姿) 碎破したまえ。忿怒したまえ。害障を破 摧したまえ。)

このご真言を唱えますと、心の悩みも身体

の苦しみもなくなり常に諸仏のおまもりを受けて一切の諸願が成就するといわれております。



生かされている

私達は日ごろ「ありがとう」といって気軽に挨拶をし、礼をのべていますがこの「ありがとう」という言葉は「有ること難し」という教えをもとに語られているのですから、存在や形が一定になることが難しいということですので、言いかえれば、知恩、報恩の心といえるでしょう。一口に「恩を知る」「恩に報いる」といいますが、それはなかなかでき

るものではありません。それにはどうしても「有ることがむずかしい」という事実を見つめなおさなければなりません。この世の中の全てのものは、常に移り変って行くものなのです。子供が親を選んで生まれることは出来ませんし、また親も子供を選んで生むことも出来ません。しかも、私達が今日ここに生かされているということは両親がいたということです。父母、そしてまた、その父母、またその父母と、何万年、何千万年続いてきた生命が、いまこの私達を生かしているのです。そして、その生命を生かし続けてきたものは、「この世にあるものは、全て他の存在によって、もちつもたれつ生かされている」という共存の道理によるものなのですから、全ての恵みに感謝の気持を忘れない様にしましょう。そしてこの「生かされている命」を精一杯燃え尽きるまで精進するという心が大切なのではないのでしょうか。

編集後記

皆様方の体験記、人生論等をお待ちしています。